

## 本草学におけるホシクサ属 (ホシクサ科) 植物

雨竜町 佐々木 純一  
福岡市 佐藤 広行

私たち人類は古来より天然物の効果を言い伝えなどにより継承し、体の不調を正すために動植物や鉱物などを実用し、その内、数において植物が多かった。そのために「薬」の文字は「草冠に藥」と書き、草木によって身体を薬にする「病気を治す草」が薬とされ、「草を本 (もと)」にするという意味で本草と名付けられ、その学問は、薬としての処方、薬効薬理、調整法などを研究する本草学として発展した。本草として用いられる植物の中にホシクサ科 *Eriocaulaceae* ホシクサ属 *Eriocaulon* の植物があり、中国では古代から民衆に馴染みがある植物で、湿地や農耕地に自生して穀物を刈り取った後に生育することから、後漢の頃 (1世紀頃) から穀精草の漢名が当てられている。日本では中国から伝来して、そのまま穀精草の漢字が当てられ「こくせいそう」と呼ばれていたが、江戸時代後期に岩崎灌園 (1828) により「ほしさう」と初めて和名が付けられた。

ホシクサ属植物は多数の細い花茎の先に花序を付け、開花した花序が夜空に輝く星のように見えることから星草とも呼ばれる。初めて紹介されたのは Plukenet (1696) による *Eriocaulon novabovacens* の図であった。その後、Linne (1737) が *Eriocaulon* を記載して初めて属名が定まった。属名は Erio (長軟毛) と Caulon (茎) から成り、細い葉が茎上に密生する様を、「恰も長軟

毛が生じたるが如くなる、から名付けたものである」とされる (中井 1911)。

ホシクサ属、本草としての穀精草は現在も中国の公定書である中華人民共和国薬典に記載され、原材料はオオホシクサ *E. buergerianum* Koern、ホシクサ *E. sieboldianum* Siebold et Zucc. ex Steud. の花茎または全草を用いるとある。薬効分類は清熱薬で薬味は甘 (緩和作用)・辛 (発散作用)、効能は明目・疏散風熱、婦経 (作用する臓腑) は肝・胃で主治 (適応) は頭痛・咽喉痛・結膜炎などの疾患に煎じて服用する。また薬理作用で水浸液は緑膿菌や肺炎双球菌の抑制などの抗菌作用が報告されている (国家薬典委員会 2020)。全く意外な特性を持つ穀精草であるが、本報は著者らが学生時代から学んできた薬用植物 (生薬) や植物分類学の基礎知識を通して、本草学の穀精草として日本への伝来とその後の発展、また西欧から植物分類学の *Eriocaulon* への経過など、ホシクサ属植物の 2000 年の系譜を紹介する。

### 古代中国における本草学

中国最古の薬物書 (本草書) に「神農本草経」がある。本草の起源として伝わる話に、紀元前 3000 年頃に炎帝神農という古代中国の神がいて、自ら野の草を嘗めて薬効を確かめて教え、そのお陰で民衆が救われたと伝わり、神農は薬祖神として祀られ